

プロデザイナーへの第一歩、卒業制作の日本一を競うコンペティション
MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2009
受賞作品決定

三菱化学株式会社

未来の一流デザイナーを目指す学生の優れた“卒業制作”を表彰する『MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2009』(主催:MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 実行委員会、委員長:水野誠一、特別協賛:三菱化学株式会社、協力:株式会社三菱ケミカルホールディングス)の受賞作品が決定いたしました。

通算 9 回目を迎えた今年度は、全国のデザイン系学生から過去最多となる合計 282 作品が寄せられました。審査員長の水野誠一氏(ソシアル・プロデューサー)ほか、デザイン・アート・学術分野の最前線で活躍する第一人者(石井幹子氏、榮久庵憲司氏、向井周太郎氏、柏木博氏、河原敏文氏、坂井直樹氏、都築響一氏、日比野克彦氏、茂木健一郎氏)で構成される審査員に、特別協賛社を代表して富澤龍一(株式会社三菱ケミカルホールディングス取締役会長、三菱化学株式会社取締役)を加え、総勢 11 名による厳正な審査の結果、個性豊かでバラエティーに富んだ全 14 受賞作品が選出されました。(資料参照)

大賞を受賞したのは、福丸諒さん(九州大学卒)の作品『[ori] Life Wear for Emergency』です。災害時に死者を安らかに葬るための遺体袋のデザインに取り組んだ意欲作です。従来、緊急対応としてビニールシートや毛布に包まれざるを得なかった犠牲者に対して、日本古来の「折形」に着想を得ながら独自のデザイン作品として解決策を提示しました。「生」を豊かにするためのデザインに対し一石を投じる独創的な発想と、身近に頻発する災害や伝染病など現代社会が等しく直面している時代性を捉えたコンセプトが高く評価されました。



大賞 『[ori] Life Wear for Emergency』

このほか、佳作 2 作品、三菱化学賞 1 作品、各審査員による審査員特別賞 10 作品が選出されました。いずれも学生らしい瑞々しい感性と伸び伸びとした自由な発想に溢れる作品です。これら受賞者には、11 月 13 日(金)、東京国際フォーラムで開催される受賞発表会にて、賞金(大賞 100 万円、佳作・三菱化学賞各 30 万円)、トロフィー・盾が授与されます。また、同会場 B1F ロビーギャラリーにて、11 月 12 日(木)から 15 日(日)まで、受賞作品を一堂に集めた受賞作品展を開催いたします。

当アワードは、学生時代の集大成でありプロへの第一歩でもある“卒業制作”の表彰を通じて、次世代を担う逸材を発掘するとともに、デザイナーの卵たちの新鮮な感性と可能性を世に広める機会の創出に努めてまいります。

MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2009 受賞作品展

開催日時: 11 月 12 日(木)~15 日(日) 11:00~19:00 (13 日(金)は 20:00 まで)

開催場所: 東京国際フォーラム ガラス棟 B1F ロビーギャラリー

入 場: 無料

本件に関するお問い合わせ先

三菱化学株式会社 広報・IR 室

TEL : 03-6414-3730

＜受賞者一覧＞

賞	賞典	作品名	受賞者	出身校
大賞	トロフィー 賞金100万円	[ori] Life Wear for Emergency	福丸 諒	九州大学 芸術工学部 工業設計学科
佳作	トロフィー 賞金30万円	本の街の音	岩井 絵理 【制作協力】 東京藝術大学 音楽学部 音楽環境創造科	東京藝術大学大学院 美術研究科 デザイン専攻
佳作	トロフィー 賞金30万円	uta	和久井 遥	日本大学 芸術学部 デザイン学科
三菱化学賞	トロフィー 賞金30万円	TOUCHE	中島 あゆみ	金沢美術工芸大学 美術工芸学部 デザイン科
水野誠一賞	審査員選評入り盾	少年ショウジ	庄司 拓弥	東京藝術大学 美術学部 デザイン科
石井幹子賞	審査員選評入り盾	land wear	松田 唯	多摩美術大学 美術学部 生産デザイン学科
榮久庵憲司賞	審査員選評入り盾	プレゼントするための音楽機器	松下 真幸	神戸芸術工科大学 デザイン学部 プロダクトデザイン学科
向井周太郎賞	審査員選評入り盾	途上国を支援する為の移動体デザイン計画 ～Bicycle Ambulance～	野口 剛	東北芸術工科大学 デザイン工学部 生産デザイン学科
柏木博賞	審査員選評入り盾	SAIBAIMAN	高須賀 活良	東京造形大学 デザイン学部 テキスタイル学科
河原敏文賞	審査員選評入り盾	プロパガンダの解剖	保田 卓也 【共同製作者】 高居 寛 佐野 淳子 藤澤 彩里	武蔵野美術大学 造形学部 視覚伝達デザイン学科
坂井直樹賞	審査員選評入り盾	alswitch	増田 久士	武蔵野美術大学 造形学部 工芸工業デザイン学科
都築響一賞	審査員選評入り盾	繊維強化セラミックスによる空間	矢野 冬馬	東京理科大学大学院 理工学研究科 建築学専攻
日比野克彦賞	審査員選評入り盾	爆弾とリボン	山本 美希	筑波大学 芸術専門学群 構成専攻ビジュアルデザイン
茂木健一郎賞	審査員選評入り盾	道具たちのささやかなる反抗期	小松崎 舞	東京藝術大学 美術学部 デザイン科

[作品の詳細については、資料2：受賞作品一覧、または当アワードウェブサイト（www.m-kagaku.co.jp/mcjda/）をご参照ください。]

＜受賞作品一覧＞

【大賞】

作 者: 福丸 諒(九州大学 芸術工学部 工業設計学科)

作 品 名: [ori] Life Wear for Emergency

作品概要: 大規模災害では、人命救助や復興支援も大切ですが、また同時に多くの方々が亡くなることも忘れてはなりません。日本では「死」をタブー視することが多く、人々は「死」から目を背けてきたように思えます。そこで、災害時における「死」という過酷な現実に向き合い、災害時における死者を葬る遺体袋をデザインしました。衛生管理の面だけではなく、故人への尊厳ある行為としての遺体処理を実現します。



【佳作】

作 者: 岩井 絵理(東京藝術大学大学院 美術学部 美術研究科デザイン専攻)

[制作協力] 東京藝術大学 音楽学部 音楽環境創造科

作 品 名: 本の街の音

作品概要: 『本の街の音』は、世界屈指の古本屋街「神保町」をテーマに、本と街と音をビジュアルで結んだ作品です。神保町の古本を原料とした和紙に、神保町の古い建物を五線譜で立体的に表現したグラフィックを印刷しました。音楽は、建物のイメージで制作したオリジナルのピアノ曲です。視覚、触覚、聴覚を通して、本を取り巻く人々の生活が折り重なってできた、この街の面白さを伝えます。

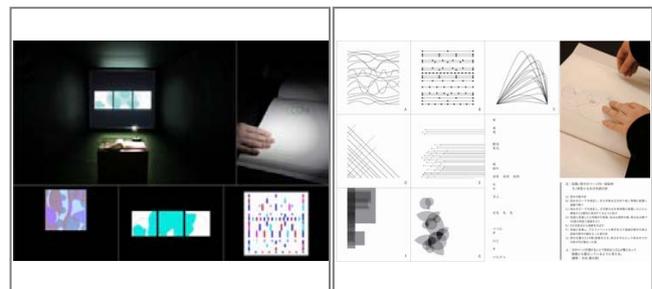


【佳作】

作 者: 和久井 遥(日本大学 芸術学部 デザイン学科)

作 品 名: uta

作品概要: 詩が属するのは文学だけだろうか。音楽、舞踏、数学のように詩も独特の音律からできており、文字が様々な「間」によって多彩なリズムを刻み、複合的な規則、構造、ベクトルなどを幾重にも積み重ね、五感を刺激する。このような詩の生成過程に含まれる複雑な要素を 150 種類の異なる記号譜に抽出しデザインすることで一冊にまとめた。指揮者が楽譜から音楽を奏でるように、この記号譜を映像化し真っ暗な空間の中で上演した。



【三菱化学賞】

作 者: 中島 あゆみ(金沢美術工芸大学 美術工芸学部 デザイン科)

作 品 名: TOUCHE

作品概要: 視覚障害者用の時計は、音声式と触覚式の二種類がある。音声式時計は、ボタンを一度押すだけで時刻を読み上げてくれるが、音が出るゆえに公共の場や家庭において、周囲に気遣いながら使用しなければならない。一方、触覚式時計は、文字盤の読み取りにくさからあまり出回ってはいない。『TOUCHE』は触覚式時計の「読み取りにくさ」を改善した新しい時計。触読しやすくすることで、自分の環境に合わせて使用する事が可能になる。



【水野誠一賞】

作 者: 庄司 拓弥(東京藝術大学 美術学部 デザイン科)

作 品 名: 少年ショウジ

作品概要: 卒業制作なので自分の卒業を祝う自分をテーマにした作品です。私は「努力、友情、愛、などジャンプの主人公と同じように大切にしている」という理由からジャンプを元に、その上にスワロスキーでデコレーションした作品です。



【石井幹子賞】

作 者: 松田 唯(多摩美術大学 美術学部 生産デザイン学科)

作 品 名: land wear

作品概要: 一見異質な衣服と空間。しかし、人を包むシェルターのような存在として共通しています。新しい場所で塗り替えられていく記憶と、殻のように脱ぎ捨てられていく服とをオーバーラップさせ、私の「抜け殻」として表現しました。



【榮久庵憲司賞】

作 者: 松下 真幸(神戸芸術工科大学 デザイン学部 プロダクトデザイン学科)

作 品 名: プレゼントするための音楽機器

作品概要: 現在の音楽は、ひとつの音楽機器で、大量の音楽を簡単に聞く事が出来るようになり、多くの音楽に触れられるようになりました。しかし、音楽をBGMのように聞き流しているのではないのでしょうか。今の音楽の聞き方を考え直し、新しい音楽機器を提案します。そこで、着目したのが、音楽を贈る行為です。昔から音楽を贈る行為はありますが、人に贈る為の音楽機器はありません。だから大切な人に贈る音楽機器を考えました。



【向井周太郎賞】

作 者: 野口 剛(東北芸術工科大学 デザイン工学部 生産デザイン学科(現プロダクトデザイン学科))

作 品 名: 途上国を支援する為の移動体デザイン計画~Bicycle Ambulance~

作品概要: 途上国における移動体の生産デザインを通し現地文化からのデザイン展開を促す提案。苦しい現状にある国の人々の生活に必要な移動体の提案とそれを持続発展させる為の計画。その製造は地域が自立に必要な利潤内部循環を、日本などの先進国が実施する現地製造の職業訓練により『地産/地消/地修/地展開』を目指すもの。主なデザインの対象は腕や自転車で引く移動であり、実作は人力による救急車。

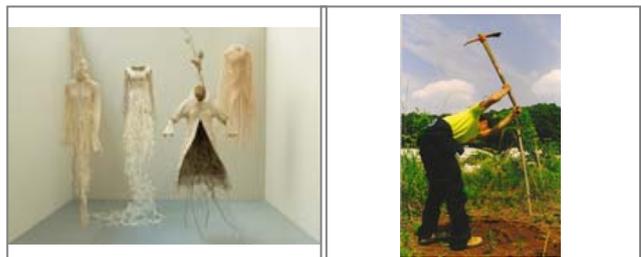


【柏木博賞】

作 者: 高須賀 活良(東京造形大学 デザイン学部 テキスタイル学科)

作 品 名: SAIBAIMAN

作品概要: 昔、人は身の回りにある自然を利用して生きてきた。食物を自然の中から得ていたように、衣服もまた自然の恵みの中から生み出したものだった。今、暮らしは大量生産、大量消費というサイクルにとって変わった。日々の暮らしと密接に関わっていた衣服は、目まぐるしいスピードで消費されるファッションという形になった。しかし、このような時代だから思い出してほしい。大地から始まる服の物語を。生命体としての服を。



【河原敏文賞】

作 者: 保田 卓也(武蔵野美術大学 造形学部 視覚伝達デザイン学科)

[共同制作者] 高居 覚、佐野 淳子、藤澤 彩里

作 品 名: **プロパガンダの解剖**

作品概要: 両大戦中のプロパガンダポスターの分析。日独伊露米英の6カ国のポスター464点を対象とし、ポスターの内容、語り方、視覚化の傾向、視覚記号の4つの軸で1点1点を分析したもの。その集積から当時の宣伝手法や傾向を明確にし、構造化することを目的とした。それらは当時の視覚文化やイメージ操作の思考方法を知る手がかりとなる。また根本的なところで現在の宣伝や広告などの視覚伝達行為が孕む本質的な問題とも繋がっている。



【坂井直樹賞】

作 者: 増田 久士(武蔵野美術大学 造形学部 工芸工業デザイン学科)

作 品 名: **alswitch**

作品概要: この世の中には車椅子を利用している人が数多くいます。その多くの方が、積雪時期に一人で外出するのは困難であり精神的、肉体的に好ましくない状況です。そこで、舗装された道の快適な走行に加え、一人でも雪道走行ができる構造を考案しました。これにより、車椅子利用者自らの精神的、肉体的な可能性の開拓につながり、より充実した生活を実現できるのではないかと考えました。

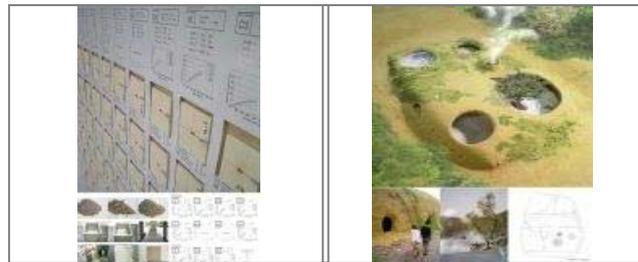


【都築響一賞】

作 者: 矢野 冬馬(東京理科大学大学院 理工学研究科 建築学専攻)

作 品 名: **繊維強化セラミックスによる空間**

作品概要: とくくと水が流れて、すいすいと鯉が泳いで、ばちばちと明かりが燃えて、まるまると端部はまるやかで、わびさびと劣化は美しく、やきものが建物になればさぞ気持ちのいい空間になることだろうと思った。本案では以上を実現するための技術論として、陶磁器質に炭素繊維を混入した繊維強化セラミックスを提案した。加えて窯炉内の火炎の流れに着目した空間構成を有する温泉施設を構想し、先の技術提案に美しいビジョンを与えた。



【日比野克彦賞】

作 者: 山本 美希(筑波大学 芸術専門学群 構成専攻ビジュアルデザイン)

作 品 名: **爆弾とリボン**

作品概要: 言葉がなく、絵だけで読む小説のようなピクチャーブック。234枚のイラストレーションを場面ごとに10個のシーンに分け、製本。白黒だがカラーを取り入れるなど、シンプルかつ幅のある表現をした。物語も自分で考案。主人公は中学生の少女で、自分の葛藤でもあり女性すべてが対面する、性別への葛藤や恐れなどをテーマに描いた。主人公が「女性」を選択すると決意するところに、自分達女性の生き方を照らし合わせている。



【茂木健一郎賞】

作 者: 小松崎 舞(東京藝術大学 美術学部 デザイン科)

作 品 名: **道具たちのささやかなる反抗期**

作品概要: 人間があんまりにも自分勝手なものだから、道具たちがついに、ふてくされました。身を削られ、汚され、捨てられる運命にある道具たちの、ささやかな反抗のかたち、24点。ガンコメモ/ひきこもり消しゴム/あべこべ色鉛筆/あまのじゃくクリップ/無口なティッシュ/高所恐怖症のハンガー/情緒不安定なお茶碗/手に余る割り箸/やさしすぎる爪楊枝/外出嫌いな紙袋/優柔不断な時計/だらしない文庫本他



＜審査員総評＞

審査員長 水野 誠一（ソーシャル・プロデューサー）

今回は、どこか群を抜いていた作品がなく、大賞以下各賞、ほぼ横一線の評価でした。その中で、独創性、時代性という観点を加味して大賞に選ばれたのが『[ori] Life Wear for Emergency』です。また前回から指摘している、「全体に、優等生的秀作が多いが、卒業制作ならではの若々しさと力強さが不足している」という点では、今回は、それなりに大胆な挑戦もありましたが、このアワードは作品の完成度以上に、作者の将来の可能性に賭ける賞ですから、今後もっと独創的な挑戦に期待したいと思います。

石井 幹子（照明デザイナー）

卒業制作というのは、4年間の勉強の成果であると共に、これからのデザイナーとしての歩みの第一歩となる、マイルストーンのような重要なものです。デザインの仕事は、常に自分と社会との関係に於いて創造されるものと思っていますが、皆さんの若々しい感性で、今の社会をどう捉えて表現するかを、楽しみにしています。表現は幼くても、コンセプトとフィロソフィーのある、将来が楽しみな作品を期待しています。

榮久庵 憲司（インダストリアルデザイナー）

実用のためのデザインは影を潜め、精神的、心理的驚きを感じさせる作品が多かった。これはデザイン分野の大きな傾向と思われる。やはり他国の生産品が大量に日本へ侵出しているが為だろう。これで日本の中小メーカーは打撃を受けているのかもしれない。そんな中であって小品ながら精神に触れるものもあり、頼もしく思っている。身障者用乗物などのデザインに目を引くものがあつたのは救いであつた。デザインの分野に広さ・狭さがあつてこそ時代の風景が見えてくる。風景をつくるのがデザインといつてよい。

向井 周太郎（武蔵野美術大学名誉教授、デザイン研究者）

本年度の応募作品には、興味深い作品の広がりが見られました。新しい社会的感性や他者への想像力を喚起する大賞該当作品や、語法の変換という手法で感性や想像力の世界を広げる密度の高い佳作該当作品などは、まさに、それらの代表的な表れです。そのほかの賞の該当の作品も、それぞれたいへんユニークで問題の視点に富んでいます。しかし一方、現代に要請されている生活・社会・世界・文明の価値の転換を見据えた、若者らしい大胆な社会的・文化的なイノベーションとしてのデザイン提案が一段と望まれています。

柏木 博（武蔵野美術大学教授、美術評論家）

ちょっとした思いつきといったものではなく、自身のテーマあるいは問題をしっかり設定して、時間をかけて取り組んでいるという作品が、今年は少なくありませんでした。たとえば、和久井遥さんの『uta』、岩井絵理さんの『本の街の音』、松田唯さんの『land wear』など、どれも落ち着いてテーマに向き合い、とても新鮮な結果を出しています。他にも新鮮な作品が数多くあり、今年の審査会はとても楽しく、また期待を感じさせるものでした。

河原 敏文（プロデューサー、ディレクター、CG アーティスト）

本年度の受賞作品を見てみると、さまざまなジャンルがバランス良く選ばれていると思います。しかしながら、私の専門であるCGやメディアデザインのジャンルの作品には物足りなさを感じています。かつて、デザイナーがコンピュータや、テクノロジーを十分に使いこなせなかった時代がありましたが、今はむしろ十分使いこなして過ぎてかえって表現が画一的なものになっています。学生の皆さんには従来の延長線上にある、作品や表現ではなく、何か新しいフロンティアを示唆するようなものを期待しています。

坂井 直樹（ウォーターデザインスコープ代表、コンセプター）

今年のMCJDAは過去最高の応募数になったようです。量だけではなく、とても質の高い作品が寄せられ審査員も、審査を大いに楽しみました。最近では、どの美大芸大に行ってもMCJDAは知られるようになりました。スポンサーが素材を扱う大企業で、かつ賞金額が大きいことも励みになっているようです。それに加え、他のデザインコンペに比べても審査員のバラエティーが実に豪華絢爛です。それらの個性的な審査員に評価をされること自体が、とてもわくわくと嬉しい話も聞きます。来年も、ますます質の高い作品が集まることを期待しております。

都築 響一（編集者）

「社会に出たらやりたいこと」よりも、「社会に出てしまったらできないこと」を見せてほしい、と去年のコメントに書きました。去年よりも不景気が進んだ分、提出された作品は攻撃的（いい意味で）になっているような気が、今年はしました。どん底景気だった70年代中期のイギリスがパンク・カルチャーを生んだように、出口の見えない日本の社会状況が、若いクリエイティブなちからを育てていくのでしょうか。

日比野 克彦（アーティスト）

時代は芽生えてきた若葉と、それに水をやる人の協同作業で生まれる。しかしそれ以前に芽が出る土壌が必要であり、そして若葉が育ち花芽をつけたころに、それを見てくれ、愛でる視線が必要である。このアワードはこれらの段階で機能しているものと考えます。次の段階へ向けて、さらなる出会いへ向けて！

茂木 健一郎（脳科学者、ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチチャー）

今年の応募作品は元気だった。私は大いに勇気もらった。若者が元気になり、それに促して社会が元気になれば日本と世界は活性化するのはないか。デザインは、必ずしも言葉を介さなくとも人と人とが通い合えるという見事なメディアである。大いに既成観念を破ってほしい。そこに愛があれば、嵐の後には必ず美しい花が咲くはずだ。

MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2009 実施概要

- 主 催：MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 実行委員会
 委員長：水野誠一／委員：石井幹子、榮久庵憲司、向井周太郎、富澤龍一
- 特別協賛：三菱化学株式会社
- 協 力：株式会社三菱ケミカルホールディングス
- 対象分野：プロダクト、グラフィック、ファッション、マルチメディア、パッケージ、
 デザイン研究などのデザイン全般。
- 応募資格：高等学校卒業後、日本で2年制以上のデザイン関連学校で修学し、
 2009年3月に卒業した学生の卒業制作。また、高等専門学校卒業生も応募可能。
- 応募方法：応募フォームによるオンライン応募。
- 審査基準：独創性、デザイン性、機能性、実現性・経済性、社会への貢献
- 審査員：審査員長 水野 誠一（ソーシャル・プロデューサー）
 審査員 石井 幹子（照明デザイナー）
 榮久庵 憲司（インダストリアルデザイナー）
 向井 周太郎（武蔵野美術大学名誉教授、デザイン研究者）
 柏 木 博（武蔵野美術大学教授、美術評論家）
 河原 敏文（プロデューサー、ディレクター、CGアーティスト）
 坂井 直樹（ウォーターデザインスコープ代表、コンセプター）
 都築 響一（編集者）
 日比野 克彦（アーティスト）
 茂木 健一郎（脳科学者、ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー）
 特別審査員 富澤 龍一（株式会社三菱ケミカルホールディングス取締役会長、
 三菱化学株式会社取締役）
- 審査方法：上記審査員による一次審査（書類）、
 最終審査（プレゼンテーションパネルおよび実物または模型）により決定。
- 賞 典：大賞 （1作品） トロフィーと賞金 100万円
 佳作 （2作品） トロフィーと賞金 30万円
 三菱化学賞 （1作品） トロフィーと賞金 30万円
 審査員特別賞（10作品） 各審査員の選評入り盾

次年度は、2010年1月より作品募集開始予定です。